

古典随筆の文章構成に関する試論

—『枕草子』と『徒然草』における章段の内部構成について—

立川 和美

1. はじめに

随筆は古くから日本文学に特有なジャンルの一つだが、本稿では、古典随筆の代表的作品として『枕草子』と『徒然草』をとりあげ、現代語の随筆との比較を通して、各章段の内部構成の特徴を明らかにしたいと思う。具体的には、まず、随筆というジャンルが持つ文章内容の特性について整理し、次に現代語と古典それぞれの随筆テキストの構成の特徴を考察する。構成については、統括の種類や内容配列に着目して、議論を進めていきたい。

2. ジャンルとしての随筆

本章では、今回分析対象とする「随筆」というジャンルに含まれる文章が持つ内容的特性について、考察を行う。

まず古典随筆についてだが、これは、『枕草子』の跋文や『徒然草』の序段に示されているように、筆にまかせて筆者の考えを自由に綴った作品であり、その内容は「多種多彩で雑多」（久保田1994）なものだといえる。特に我が国最初の随筆である『枕草子』は、各章段ごとに多様なテーマをとりあげているが、この内容的特徴は、そのまま『徒然草』に受け継がれている。その後、現代随筆への過渡期となる近世に入ると随筆作品の数は激増するが、それに伴ってその内容の種類も、「教訓・自伝・思想・見聞雑記・文芸・紀行類」（吉田1961）などと更に複雑化する。

一方、現代語の随筆も、書き手の「気持ちを書いた文章」で「特に決まった書き方があるわけではな」（中村1999）く、文学的特性が認められるものから描写を中心とするものまで、その内容は多岐に渡っている。また日記や紀行文なども質的な連続性を持っており、ジャンル相互に厳密な境界線を規

では、文章論における随筆の先行研究を概観しておきたい。

まず古典随筆については、山口(1984)が「随筆の代表的な作品」として『枕草子』を挙げ、そのテキストの展開を、章段の種類ごとにまとめている。それによると、「日記的章段」は、時間的順序を前面に押し出して主観的な感慨を出来事に組み合わせながら展開し、「随想的章段」と「類聚的章段」とは、共に極めて随筆らしい章段で、最初に文章全体のテーマを示した後に、具体的な事実や例証を列挙するという特徴が指摘されている⁽¹⁾。

また鈴木(1988)は、『徒然草』の構成について、冒頭近くの「出典を用いている章段」に頭括型が多く、かつ弁証法的な論理展開を持つ性質があることを明らかにしている。

一方、現代随筆のテキスト分析では、作家ごとの文体的特徴に関する研究が圧倒的に多い。特に文章構成に言及した例として、木坂(1995)は、島崎藤村の『感想集』の文章が「統括的感想から書き出す」「演繹的展開」を持つとする他、佐久間(1995)は、向田邦子『父の詫び状』において、尾括式が多く、クライマックスや落ちの効果が重視されていることを認めている。

4. テキストの「文段」と「文章構成」—本研究における分析の方法

本研究では、古典随筆の各章段⁽²⁾や現代語の短編随筆の各作品の内部に「文段⁽³⁾」を認定し、その統括類型と内容配列を考えることで内部構成の特徴を明らかにする。まず「文段」の認定では、以下の5項目を手がかりとする。その際、最も大きく切れる箇所を最優先し、それと同じ大きさで切れる部分が他にある場合には複数の分断点を認めるが、相対的に切れる力の弱い箇所は分断点とは認めないものとする。

<本研究における文段認定の手がかり>

1. 新しい話題の開始
2. 場面の転換
3. 筆者の視点や立場の転換
4. 伝達内容(事実/意見等)の転換
5. 叙述方法(描写/説明等)の転換

また構成については、推論形式をもとにした「統括類型」と、段と段との

内容の相互関係を示す「内容配列」に着目し、これらのかけあわせによって認定を行う⁽⁴⁾。

<本研究における統括類型（推論形式）>

推論形式	演繹	帰納	帰納+演繹	演繹+帰納	不定
統括類型	頭括型	尾括型	中括型	両括型	潜括型

<本研究における内容配列>

拡張型	段相互の内容に上下関係がなく、同次元で関係。 [タイプ] 列挙・時空間・対照
進展型	段相互の内容が上下関係を構成し、議論に深まりや進展がある。 [タイプ] 内容の密度（漸層・主要⇔付加・未知⇔既知など） 包摂関係（全体⇔部分・抽象⇔具体・上位⇔下位など） 因果関係（原因⇔結果・主張⇔根拠など） 問題解決（課題－解答など） 論理関係（仮説－検証－結論など）

以下に、本研究での方法を用いた文章構成認定の具体例を示しておきたい。

『仁和寺なる法師、年寄るまで石清水を拝まざりければ、心憂く覚えて、ある時思立ちて、ただひとり徒歩よりまうでけり。極楽寺、高良などを見て、かばかりと心えて、帰にけり。さて、かたへの人にあひて、「年ごろ思ひつること、果し侍ぬ。聞きしにも過ぎて尊くこそおはしけれ。そも、まいりたる人ごとに、山へ登りしは、何事かありけむと、ゆかしかりしかど、神へまいるこそ本意なれと思ひて、山までは見ず」とぞ言ひける。『少しのことにも先達はあらまほしきことなり。』（『徒然草 第52段』）⁽⁵⁾

この章段では、最後の一文において、伝達内容がそれまでの「事実」に対して「見解」となる点で、大きく分断が見られる。その他、前半の第3文「さて、かたへの人に」の箇所ですら「場面の転換」が行われるが、この前後の内容は共に事実を述べている点で先の箇所に比べて相対的に切れる力が小さい。

よって、最後の一文の直前で二つの文段に分かれる構成と考える。またこれは最後に筆者が自分の見解を示して内容をまとめる「尾括」であり、前半が「根拠」、後半が「主張」を示す「因果関係」の配列をとっている。

次章からは、この方法を用いた分析結果をもとに、文章構成を考察する。

5. 現代語の随筆の文章構成

本章では、現代語の随筆の文章構成について考える。前述の通り、先行研究では特定の作家の随筆についての文章分析が中心に行われていた。本稿ではそうした個人の文体的特徴ではなく、異なる作家による短編随筆100編を分析し、ジャンルとしての一般的特徴を捉えてみたい⁽⁶⁾。

<現代語の随筆の文章構成>

配 列	推論	演繹	帰納	帰納+演繹	演繹+帰納	不定	合 計	
	統括	頭括	尾括	中括	両括	潜括		
拡 張 型	列挙					7	7	
	時空間		2			33	35	
	対照					6	6	
進 展 型	内容密度	5	8			1	2	16
	包摂関係	8	6			4		18
	因果関係	3	6			2		11
	問題解決		7					7
	論理関係							0
合 計		16	29	0		7	48	100

統括は「潜括」が圧倒的で、身边雑記的なテキストの大部分がこの型をとっている。次いで「尾括」が多いが、これは前半に叙述した事実を後半で大まかに括る形式であり、書き手が主張を明示するような性質はほとんどない。また配列は、小説などに見られる「時空間」の展開が中心で、他には中心的话题の前後にそれから連想される話題を付け加える「内容の密度」や、テーマを抽象的に提示した前後に具体的事項を並べる「包摂関係」が多い。

このように現代語の随筆は、読み手に対して明確な主張を示すのではなく、事実や体験を自由に綴るといった肩の凝らない構成をとるジャンルだといえる。

6. 古典随筆の各章段の文章構成

以下では、『枕草子』と『徒然草』から各々50の章段をとりあげ、章段内の構成を分析する⁽⁷⁾。

(1) 『枕草子』の文章構成（表内の数字は%）

配列	推論	演繹	帰納	帰納+演繹	演繹+帰納	不定	合計
	統括	頭括	尾括	中括	両括	潜括	
拡張型	列挙					6	6
	時空間		4			14	18
	対照		2			12	14
進展型	内容密度	4	8				12
	包摂関係	32	12				44
	因果関係		4			2	6
	問題解決						0
	論理関係						0
合計		36	30	0	2	32	100

統括は「頭括」と「尾括」、「潜括」が用いられ、配列では連想を用いて話題を展開する「包摂関係」が多い。これは章段内に存在する文段相互が、「全体⇄部分」「抽象⇄具体」「上位概念⇄下位概念」といった近接的（換喩・提喩的）な意味関係を成し、中心的な内容を持つ文段を捉えやすいタイプである。以下、本節では、『枕草子』の文章構成について、先行研究において指摘されている章段の内容的特性との関係という視点から考察を行う。

まず類聚的章段だが、これはいわゆる「～もの」や「～は」といった言葉で始まる「ものづくし」とされる章段であり、先行研究に指摘されるように、

やはり「頭括」が多い。次の第27段などは、その典型的な例である。

<頭括型・包摂関係の例 [第27段] >

『すぎにしかた恋しき物』かれたる葵。雛あそびの調度。二藍葡萄染などのさいでの、をしへされて草子の中などにありける、見つけたる。又、折から哀なりし人の文、雨などふりつれづれなる日さがし出たる。去年のかはほり。

次に、類聚的章段と同様、最初にテーマを示した上で具体例を挙げる構成をとるとされる随想的章段について見てみたい。例として以下に示す第29段は、乗り物についての随想的章段である。

<潜括型・対照関係の例 [第29段] >

『びらうげはのどかにやりたる。いそぎたるはわろく見ゆ。』網代ははしらせたる。人の門の前などよりわたりたるを、ふと見やる程もなく過て、ともの人ばかりはしるを、誰ならんと思ふこそおかしけれ。ゆるゆると久しくゆくは、いとわろし。

この章段は、前段が上流の正式の車、後段が格式張らない車と、相互の内容が対照的に書かれており、冒頭でテーマが示される構成ではない。これに似たものとして、内容的に類聚的章段の性格を併せ持つ序段（春はあけぼの）や第7段（正月一日）などは、「潜括・列挙」の構成をとっている。このように、『枕草子』の随想的章段でとられる構成は、必ずしも一つのタイプに固定されるのではないということがいえそうである。

最後に、一般的に時間的順序に従って展開されると考えられる日記的章段について見てみたい。

<尾括型・因果関係の例 [第98段] >

『中納言まゐり給ひて、御扇たてまつらせたまふに、「隆家こそいみじき骨はえて侍れ。それを張らせてまいらせんとするに、おぼろげの紙はえ張るまじければ、もとめ侍なり」と申給。「いかやうにかある」ととひ聞えさせたまへば、「すべていみじう侍り。『更にまだ見ぬ骨のさまなり』となむ人々申す。

まことにかばかりのはみえざりつ。」と言たかくの給へば、「さては扇のにはあらで、海月のななり」と聞ゆれば、「これは隆家が言にしてん」とて笑ひ給。『かやうの事こそは、かたはらいたき事のうちにいれつべけれど、「ひとつなおとしそ」といへばいかがはせん。

前半は出来事自体の時間であり、後半は執筆時の時間という点で大きく二つの部分に分断されるが、内容から見ても、前段は時間的推移に沿って事実が述べられ、後段はその出来事に対する筆者の姿勢が示されているという点で性質が異なっている。章段全体の構成は、最後にある筆者の姿勢によってまとめられる「尾括」で、「因果関係」と捉えられる。今回の分析では、この他の日記的章段でも、筆者が最後に事柄に対する見解を示した「尾括」が見られた。日記的章段では、もちろんエピソードの叙述（日記的要素）は時間的推移に沿って展開するが、それだけに終わらず、むしろその事実に対する筆者の姿勢が明記される点に『枕草子』の構造としての特徴があり、それが上記の例のような「尾括」として現れているのだと考えられる。

(2) 『徒然草』の文章構成（表内の数字は%）

配 列	推論	演繹	帰納	帰納+演繹	演繹+帰納	不定	合 計
	統括	頭括	尾括	中括	両括	潜括	
拡 張 型	列挙					6	6
	時空間				2	4	6
	対照					10	10
進 展 型	内容密度	8	10		2		20
	包摂関係	16	12		8		36
	因果関係	12	10				22
	問題解決						0
	論理関係						0
合 計		36	32	0	12	20	100

統括は「頭括」と「尾括」に加えて「両括」が見られ、『枕草子』に比べて筆者の主張や内容の要約といった統括部が明確に示される傾向が強い。また配列は「包摂関係」と「内容の密度」が中心で、内容の抽象的な要約や重要事項といったテーマの明示、筆者の強い主張の提示などを含む章段が多い。以下では、特徴的な内容構成をとりあげ、考察を行っていくことにする。まず典型的な「頭括」の例から見てみたい。

<頭括型・包摂関係の例〔第15段〕>

『いづくにもあれ、しばし旅立ちたること、目覚むる心ちすれ。』そのわたり、ここかしこ見歩き、ゐ中びたる所、山里などはいと目なれぬことのみぞ多かる。都へ便求めて文やり、「そのこと、かのことかの便宜に忘るな」など言ひやりたるこそをかしけれ。さやうの所にてこそ、万に心づかひせられ、持てる調度まで、よきはよく、能ある人かたちよき人も、常よりはをかしと見ゆれ。寺、社などに忍びて籠りたるも、をかし。

冒頭の一文が筆者の意見を示す統括部として前段を形成し、続いてそれに関する具体例が示される「包摂関係」である。『徒然草』では、このように一文から成る文段が筆者の主張を凝縮して全体の内容を統括する章段が非常に多い⁽⁸⁾。またこの15段では、冒頭のテーマを受けて、それ以降、卑近な事象から次第に連想を広げて読み手をひきつける周到な展開を持つ点も注目される。兼好は、『徒然草』を筆に任せて自由に記した作品だとしているが、こういった内容展開には、読者への伝達に配慮した筆者の積極的な構成意識が感じられる。こうした意識は、次の第37段のように、自然な態度で自分の考えを自由に述べるといった叙述を通しながらも、読者には筆者の考えが明確に伝わってくる「潜括」の例にもよく表れている。

<潜括型・対照関係の例〔第37段〕>

『朝夕隔てなく馴れたる人の、ともある時所をき、引きつくるへるさまに見ゆるこそ、「今さらかくやは」と言ふ人もありぬべけれど、猶うやうやくよき人かなと覚ゆれ。』うとき人の、うちとけたることなど言ひたる、又よし

と思ひつきぬべし。

この章段では、馴染みの人とさほど親しくない人という対照的な例を並べているが、「自分の周りの人が示す好ましい態度」を叙述することによって、筆者自身もこうありたいという人としての生活態度に関する考えが読み手に伝わってくる。これは、筆者が意識的に選択した簡潔な内容構成が、それを促していると見ることができるだろう。

7. まとめ

本稿では、古典随筆の代表的作品として『枕草子』と『徒然草』をとりあげ、その文章構成について考察した。統括については、両作品とも筆者の主張やテーマが読者に強く認められるタイプ、すなわち統括部が極めて明確な「頭括」と「尾括」が多く、「潜括」でも内容の主題がはっきりと読みとれる章段が多かった。この傾向は特に『徒然草』に強く、筆者の主張を抽象的に示した一文が一つの文段を形成し、全体を統括する章段が多数見られた。これは、現代語の随筆の大部分が、主張やテーマを示さない「潜括」であったことと大きく異なる点である。ここから、古典随筆とは、現代随筆に比べて、筆者の主張を強く示す評論や論説といったジャンルに近い性格を持ち併せたテキストだということができる。

その他本稿では、古典随筆には中心的内容が捉えやすい「包摂関係」の配列が多いこと、『枕草子』では、随想的章段において様々な文章構成が認められることなどが明らかになった。

今後の課題としては、さらに古典作品の分析対象を広げ、また歴史的な流れも含めて随筆の文章構成について分析を行いたいと考えている。

注

- (1)半澤(1966)も、「枕草子の基本的構造」としてこれと同様に、章段内容のタイプに対応した展開の認定を行っている。
- (2)本稿での章段の認定は、岩波書店刊の『新日本古典文学大系』に依拠する。

- (3)市川(1978)は「文段」について、「文章の内部の文集合(もしくは一文)が内容上のまとまりとして相対的に区分される部分」という意味的視点に立った規定を行っている。市川説は現代語を対象とした研究だが、基本的に改行段落を持たない古典テキストに対しても、その認定の手法は十分に対応可能であり、本稿ではこれを文章構成の分析に用いることとする。
- (4)文章構成については、古くは五十嵐(1909)の文章組織の形式があり、近年では長田(1995)による段落数を中心に整理した文章構成の型や、寺村他(1990)の段の統括機能による文章型の分類などがある。また具体的な分析の手法については、立川(2001)において議論を行った。
- (5)以下、文段の区切りは、¶を段の頭につけることを本稿のルールとする。
- (6)使用テキスト③、④より500～2300字の作品を50編ずつ任意に選んだ。
- (7)分析対象は、両作品とも2文以上の、総文字数100～800字で構成される章段を、冒頭から任意に選んだ。また、『枕草子』には異本が多く伝本の限定は難しいが、本稿では活字本として多く受け入れられている三巻本系統の本文を用いる。『徒然草』についても、第30段を境として長期の執筆期間が想定されており、その間に各章段の文体に変化が見られる可能性も存在するが、ここでは作品全体の傾向を知る方針で分析を行う。
- (8)他に、第1段、6段、10段、30段、33段、43段、51段など多数が一文で統括を行っている。例えば51段は、逸話を扱った日記性の強い章段だが、水車づくりの専門家に対する感嘆を表す最後の一文が全体を統括する「尾括」である。

引用文献

- 五十嵐力(1909)『新文章講話』早稲田大学出版部
- 市川 孝(1978)『国語教育のための文章論概説』教育出版
- 木坂 基(1995)「第2章 島崎藤村」湊吉正編 表現学会監修『表現学大系各論篇第28巻』
教育出版センター新社
- 久保田淳(1994)「随筆文学の系譜」『国文学 解釈と鑑賞59(5)』至文堂
- 佐久間まゆみ(1995)「第12章 向田邦子」湊吉正編 前掲書
- 鈴木 久(1988)「徒然草の表現」稲賀敬二・鈴木久・浅野日出男著 表現学会監修『表現学体系各論篇第5巻』教育出版センター新社

- 寺村秀夫他編(1990)『ケーススタディ 日本語の文章・談話』おうふう
- 中村 明(1999)『テキスト日本語表現』明治書院
- 長田久男(1995)『国語文章論』和泉書院
- 半澤トシ(1966)「枕草子段構成試論」『日本文学26』東京女子大学
- 山口仲美(1984)「文章の展開」『研究資料日本文法8 構文編』明治書院
- 吉田精一(1961)『随筆入門--鑑賞と書き方--』河出書房
- 立川和美(2001)「説明的文章に見られる文章構造の特徴」文体論学会第79回口頭発表レジ
ュメ

使用テキスト

- ①渡辺 実校注(1991)『新日本古典文学大系25 枕草子』岩波書店
- ②佐竹昭広・久保田淳校注(1989)『新日本古典文学大系39 方丈記 徒然草』岩波書店
- ③宇野千代他編(1983)『日本の名随筆』作品社
- ④日本エッセイストクラブ編(1998～2001)『ベストエッセイ集』文芸春秋

本稿は2004年のワークショップにおける口頭発表の内容に加筆修正を行ったものです。
貴重なご意見、ご指導を賜りました諸先生方にはこの場を借りてお礼申し上げます。

(たちかわ かずみ)